

高知県 南国市

平成8年度 高知空港発掘調査

田村遺跡群

現地説明会資料



1997年3月15日（土） PM 2:00

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

田村遺跡群発掘調査概要

1. 調査の目的

高知空港拡張整備事業に伴い、拡張計画地内に所在する田村遺跡群について、工事により影響を受ける部分における発掘調査を実施する。発掘調査は現地調査と遺構・遺物の整理作業を行い、報告書等を刊行することにより遺跡の記録保存を目的とする。

2. 田村遺跡群の概要

田村遺跡群は、前回の高知空港拡張整備事業に伴い発掘調査が行われている。前回の調査以前にも、西見当遺跡などの弥生時代の遺跡の調査が行われており、高知平野における弥生時代前期を代表する遺跡の所在地として知られていた。また、空港の北に隣接して、室町時代の土佐国守護代である細川氏の居館とされる田村城館跡（南国市指定史跡）も存在しており、高知平野南部の遺跡の中心地帯であった。

遺跡の範囲は、前回拡張範囲外にも広がっており、極めて広範囲の複合遺跡である。その立地は物部川の自然堤防上であり、物部川の氾濫にも余り影響は受けることなく、現在まで残された貴重な文化遺産と言える。

前回の発掘調査では、縄文時代後期、弥生時代前期～後期、古墳時代、平安時代、室町時代、戦国時代、以降現代に至る各時代の遺構・遺物が検出されている。中でも弥生時代と中世の2時期が遺構・遺物ともに最も多く、田村遺跡群の中心となる時代である。

縄文時代では、磨消縄文や沈線文などを持つ土器片とともに、多量の打製石斧が出土している。弥生時代では、前期初頭の集落跡と前期の小区画水田跡（足跡も発見された）、中期末から後期前半の集落跡が発見され、全国的にも注目された。古代では、平安時代の整然とした方向と配置を示した掘立柱建物跡が発見され、荘園（田村荘）との関連が考えられた。中世では溝に囲まれた屋敷跡（環濠屋敷跡）が発見され、母屋・納屋などの掘立柱建物跡や石組みの井戸も検出されており、当時の生活の跡を窺い知ることができた。また、遺物からすると時期的にも13・14・15世紀の3時期に分かれており、各時期による環濠屋敷の配置や田村城館との関係を知ることができた。

前回の調査により発見された遺構は次のページに掲げるとおりである。

田村遺跡群前回調査の主要遺構

弥生時代前期初頭の集落	・ ・ ・ 竪穴住居跡	10棟 (円形5棟・方形5棟)
	掘立柱建物跡	14棟
弥生時代前期	・ ・ ・ ・ ・ 竪穴住居跡	4棟
弥生時代中期	・ ・ ・ ・ ・ 竪穴住居跡	23棟
弥生時代後期	・ ・ ・ ・ ・ 竪穴住居跡	23棟
合 計		60棟
古 代	・ ・ ・ ・ ・ 掘立柱建物跡	14棟
中 世	・ ・ ・ ・ ・ 環濠屋敷跡	31屋敷 (井戸を伴うもの16屋敷)

3. 調査対象地

高知県南国市田村

4. 調査期間

平成8年11月18日～平成9年3月31日

5. 調査面積

約17,300㎡

6. 調査体制

委 託 者	運輸省 第三港湾建設局	高知港工事事務所
調査主体	高知県教育委員会	
調査実施	財団法人高知県文化財団	埋蔵文化財センター

7. 調査担当

調査第2班長	森田尚宏	調 査 員	吉成承三
主任調査員	前田光雄	専 門 調 査 員	小島恵子
専 門 調 査 員	田坂京子	調 査 員	坂本憲昭
調 査 員	坂本裕一	主任調査員	三橋麻里

8. 調査協力

高知県 交通対策課 空港整備事務所

南国市教育委員会

田村・下田村地区を中心とする地元の方々

9. 調査方法

- (1) 空港拡張計画地の中で今回対象となる範囲について、平成8年7～9月にかけて本調査に先立つ試掘調査が実施された。試掘調査は4mグリッドを基準とした試掘坑を任意の位置に設定し、調査を進めた。試掘調査の結果からみて、空港拡張範囲の中で遺構・遺物の確認された東半分が遺跡の中心部分と考えられ、これをもとに一応の本調査対象地を確定した。試掘調査結果の内容としては、進入灯部分を中心として弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡や溝跡・柱穴等が多数検出され、やはり弥生時代の集落の存在がほぼ確認された。弥生時代以外では、南端部において縄文時代後期の遺物包含層が検出され、北部では中世の柱穴も発見されており、前回の発掘調査を上回る遺構・遺物量が想定された。
- (2) 本調査は、試掘調査の結果と現地の状況により調査対象地を決定し、現状の1町四方の地割りを基準とした調査区名称を設定した。今年度における調査区の名称は次のとおりである。B-1区・E-1区・F-1区・G-1・2区・H-1区・K-1・2区。また、調査対象区全体に公共座標によるグリッドを設定し、測量の基準点とした。
- (3) 各調査区ともに表土及び無遺物層は重機により掘削を行い、遺物包含層については人力により掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。遺構の完掘後は航空写真測量により、遺構の全体測量を行っている。同時に各遺構・遺物については必要に応じて写真撮影による記録を行っている。
- (4) 現地発掘調査を実施するとともに、出土遺物の洗浄、注記、接合などの基礎的整理作業も同時に並行して行い、検出された遺構・遺物の概要について早期に確認する作業を実施している。

10. 調査内容

今回の各調査区の調査内容は以下のとおりである。

検出遺構

B-1区	環濠屋敷跡	1箇所	土坑	75基	溝跡	11条
	ピット	250個				
E-1区	竪穴住居跡	3棟	掘立柱建物跡	1棟	土坑	11基
	溝跡	2条	ピット	21個	自然流路	1条
F-1区	竪穴住居跡	8棟	土坑	36基	溝跡	13条
	ピット	91個				
G-1区	竪穴住居跡	4棟	溝跡	1条	土坑	4基
G-2区	掘立柱建物跡	1棟	溝跡	2条	土坑	1基
H-1区	掘立柱建物跡	1棟	土坑	10基	焼土	7基
	ピット	70個				
K-1区	竪穴住居跡	28棟	掘立柱建物跡	5棟	土坑	80基
	溝跡	20条	ピット	2000個	自然流路	1条
K-2区	竪穴住居跡	25棟	掘立柱建物跡	1棟	土坑	120基
	溝跡	1条	ピット	2000個	井戸	1基

検出遺構合計 竪穴住居跡 69棟 掘立柱建物跡 9棟 土坑 337基 溝跡 50条
 ピット 4.432個 環濠屋敷跡 1箇所 自然流路 2条 井戸 1基

出土遺物

B-1区	コンテナケース	約30箱	弥生土器・石包丁・石斧・磨製石鏃・土師質土器・青磁・白磁・備前・近世陶磁器			
E-1区	コンテナケース	約50箱	弥生土器・石包丁・石斧・石鏃・砥石・叩石・ガラス玉・管玉・青銅鏡片 鉄族・装身具			
F-1区	コンテナケース	約70箱	弥生土器・石包丁・石斧・石鏃・ガラス玉・紡錘車			
G-1区	コンテナケース	約15箱	弥生土器・石包丁・石鏃・叩石			

- G-2区 コンテナケース 約5箱
 弥生土器
- H-1区 コンテナケース 約50箱
 縄文土器・石錘・磨製石斧・打製石斧・石鏃・叩石
- K-1区 コンテナケース 約70箱
 弥生土器・土師質土器・白磁・瓦器・石包丁・石斧・石鏃・叩石
- K-2区 コンテナケース 約110箱
 弥生土器・青磁・石包丁・石斧・石剣・石錘・叩石・ガラス玉

遺物総数 コンテナケース 約400箱

11. 調査結果

- (1) 現空港に接したB-1区では、地表下約50cmで中世を中心とする遺構群が検出されている。主な遺構は調査区のほぼ中央を南北に走り、西方へ曲がる大溝により区画された環濠屋敷であり、大溝の内側にもう1本の溝をもつ、2重の溝区画内（西側部分）には、多数のピット（柱穴）が発見されている。溝の東側は中世の遺構密度は低く、近世・近代の土坑等が中心を占める。また、北半部では中世の遺構と同面で弥生時代の土坑等が検出され、下層には弥生時代前期～中期の遺物包含層も存在しているようである。
- (2) E-1区は調査前に人家があり、東半部にかけて攪乱されていたが、弥生時代中期～後期の竪穴住居跡とともに自然流路が検出され、多量の遺物が出土している。また、竪穴住居跡からは青銅鏡片や管玉・ガラス小玉等が出土しており、弥生時代の豊富な遺物を見ることができる。青銅鏡は外縁部のみであり判別し難いが、内行花文鏡ではないかと考えられる。
- (3) F-1・G-1・G-2・K-1・K-2区は現空港の西に隣接する進入灯の周辺であり、竪穴住居跡が集中的に検出され、弥生時代中期末から後期初頭の集落の中心地に当たる。特に東側部分は竪穴住居跡が密集し、重なり合う住居跡が数多く存在する。竪穴住居跡は円形と方形のものが見られ、円形のものには径8~10mの大形のもの、径4m程の小形の2つのグループに大きく分かれる。方形のものは比較的小形のものが多く、一辺3~4mのもので占められている。これらは若干の時期差が認められ、結果として多くの住居跡が重なり合った状態で見つかっている。

全般的に住居跡から出土する遺物は少ないが、K-2区西部の住居跡では多量の遺物を出土するものがある。また、焼けた考えられる住居跡も十数棟見つかっており、住居跡の床面には、炭化材や焼土が発見されている。K-2区の住居跡では粘土甕が出土しており、土器作製のために粘土を持ち込んでいたものとみられる。住居跡以外では溝状の土坑が十数基発見されており、約半数からは多量の土器が出土している。遺物は壺・甕が集中的に入っており、一括放棄されたものである。また、溝状の遺構からは、つぶて・投弾の可能性のある径3~5cm程の小石がまとめて出土しており、注目される。

その他の遺構としては、自然流路とみられる溝跡が確認されており、E-1区からF-1区通じてK-1区の北部部で西方向に屈曲している。この流路からは多量の中期を中心とする弥生土器が出土しており、今回調査区の北側にも遺跡の範囲が大きく広がっていると考えられる。

弥生時代以外にも、中世の柱穴、溝跡、土坑が見つかっており、数基の柱穴からは土師質土器の皿・椀、白磁碗などが出土しており、建物に関する地鎮が行われた可能性がある。

- (4) H-1区では、縄文時代後期前半の土器群が検出されている。縄文土器は調査区の南半部に集中しており、地表下約80cmの黒褐色土中から出土している。黒褐色土下の地山面には土坑、ピットの他に焼土のブロックが7箇所ほど発見されており、土坑からは微細な骨片も出土することから、住居跡は発見されていないが、縄文時代の生活跡が確認されている。縄文土器には磨消縄文や沈線文がみられ、土器型式からすれば九州の鐘崎式に類すると考えられる。また、石器では石鏃・石斧以外に石錘が約100個ほど発見されており、注目される。石錘は漁労の網に使用する重りであり、5~6cmの小形のもが大半であり、河川用の重りではないかと考えられる。

12. 調査成果

- (1) 縄文時代後期前半の土器・石器、土坑、焼土が集中的に発見された。土器は九州との関連を持つものと見られ、石器は多量の石錘が出土した。石錘は魚網の重りであり、小形であるところから、河川用と考えられる。前回調査では、打製石斧が多量に出土しており、縄文時代後期に沖積平野へ活動の場を広げたものと考えられる。

(2) 弥生時代では中期末から後期初頭の竪穴住居跡が重複し、集中的に検出されており、高知県では最大規模の集落であることが確認された。K-1区、K-2区を合わせて竪穴住居跡は53棟見つかり、前回の進入灯部分の調査を合わせると60棟以上の住居跡が調査されたことになる。全体では前回調査分を含め129棟となり、周辺域にも同時期の住居跡は展開していることは確実であるところから、南四国最大の拠点集落であることが判明した。

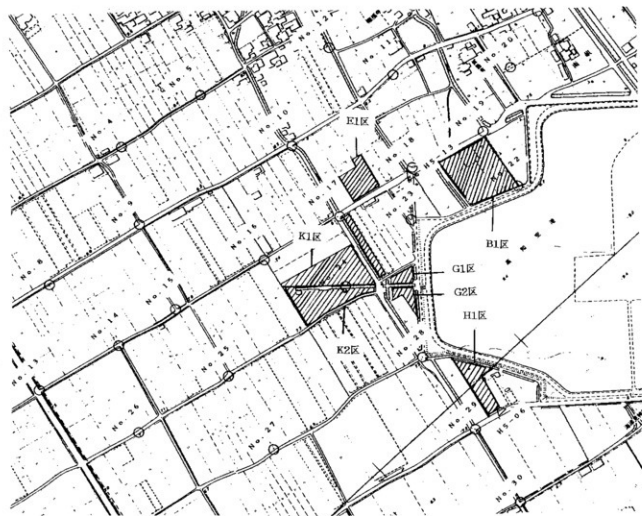
また、多量の弥生土器を出土し、同一の方向性を持つ溝状の土坑が十数基発見されており、注目される。その性格については調査途中であり、現段階では確定できないが、祭祀棟に関わる遺構である可能性が考えられる。

出土遺物には、弥生土器、石包丁、石斧、石鏃、叩石等の他に、ガラス小玉、管玉、青銅境片なども出土しており、当時の生活をうかがい知ることができる。

(3) 中世では、田村城館の南にあたる調査区であるB-1区において、環濠屋敷跡が発見されている。調査区の西半分が溝に囲まれた屋敷跡の範囲であり、内部には掘立柱建物の柱穴が多数検出されている。溝は二重に巡っており、内側の溝には水溜状の施設が付属している。時期的には15世紀と考えられる。

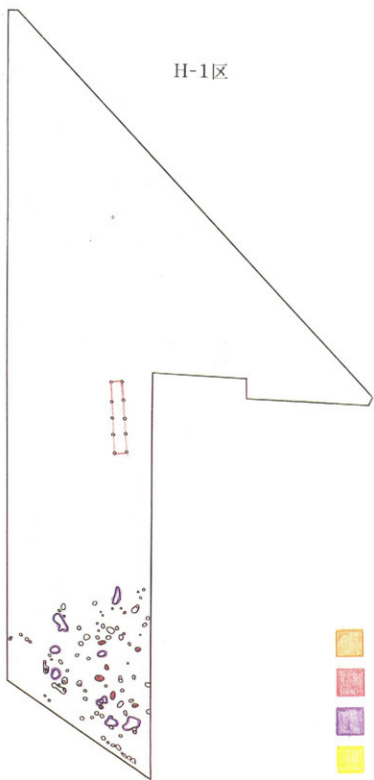


調査対象地位置図



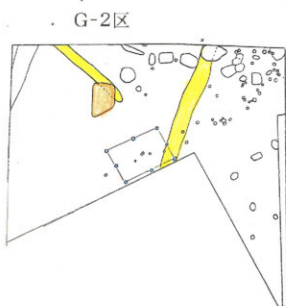
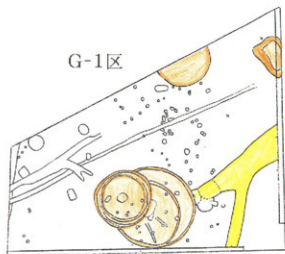
調査区位置図

H-1区

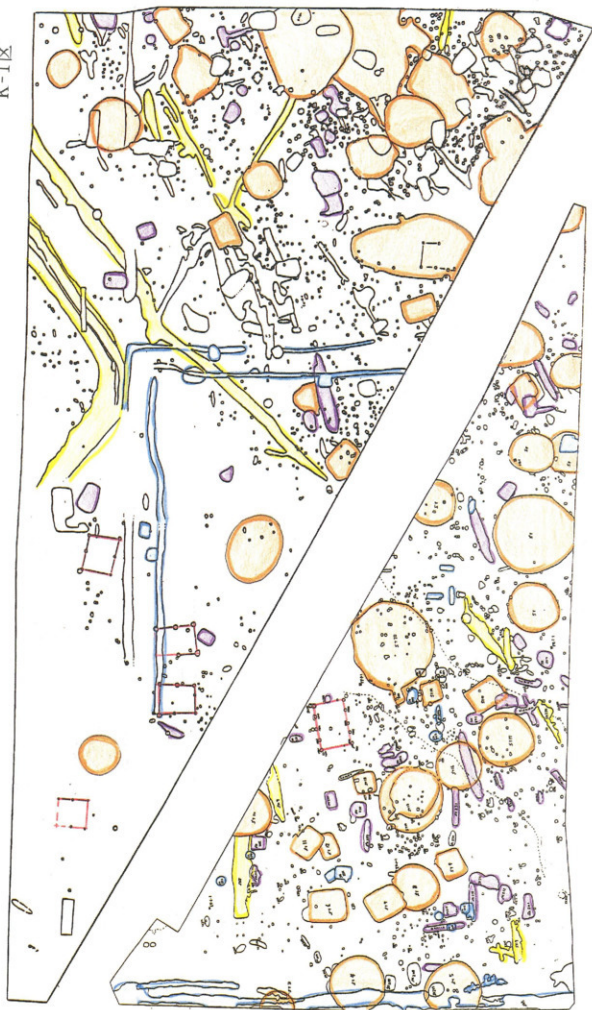


凡例

-  ...住居跡(弥生時代)
-  ...掘立柱建物跡(弥生時代)
-  ...土坑(弥生時代)
-  ...溝跡(弥生時代)
-  ...自然流路
-  ...中世・近世の遺構

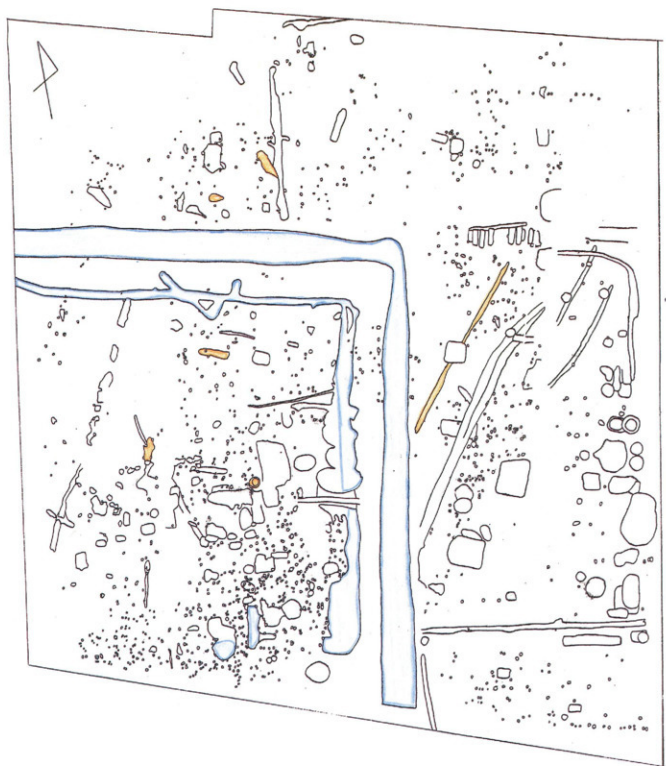


K-1区



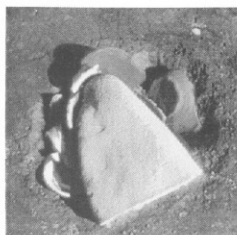
K-2区

B-1区





K1区全景



K1区出土土器



K2区全景



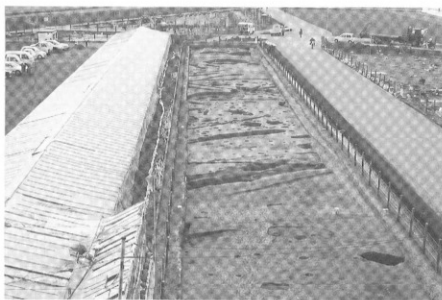
B1区土器出土状況



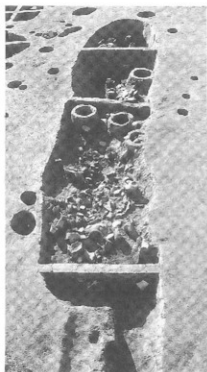
K2区竪穴住居跡



K2土器出土状況



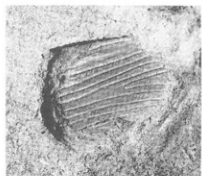
F区全景



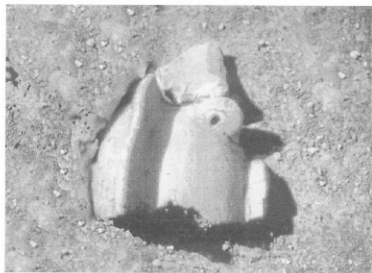
F区土坑



H区全景



H区出土繩文土器



B1区土器出土狀況